

阿部初枝著

風
灯
下。

老いと共に二十年

三浦書房

阿部初枝著

風
火
下
老いと共に二十年

三浦書房

著者紹介

阿部初枝(あべ・はつえ)

1937年埼玉県立川越高女卒, '40年日本赤十字社大連病院看護婦養成所卒業。'63年より老人看護に取り組む。'78年『春く刻』, '80年『約東の季節』(華胥の夢改訂版), '81年『たまゆらの』(日本看護協会出版会)出版, 群馬県文学賞, 上毛文学賞など受賞。日本作家クラブ会員, 文学誌『風電』『未遂』同人。

風灯下—老いと共に20年 <シルバー・フレンド3>

1982年9月25日 初版第1刷発行 <検印廃止>

定価はカバーに表示しています

著者 阿部初枝
発行者 杉田信夫
印刷者 坂本起一

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房
607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話 (075) 581-5191 (代表)
振替口座・京都2-8076番

©阿部初枝, 1982 内外印刷・新生製本
0395-67611-8028
Printed in Japan

目次

I

ひとりぼっち

五

端目はなめ

三

うばひろい山

六

やーい、御苦労さん

九

ある立ち直り患者

四

まわりくどさ

四

床ずれ

四

生と死と

五

II

肌を感じる幸福

六

気付いて欲しい

七

的

七

絵にならぬところでも 一七

孤独のひずみ 一七

親切 一七

おばあちゃん奮闘 一七

わらじがけ 一〇

III

おむつ 一〇

楽しく長生き 一三

最後まで消えない愛 一七

遅咲きの哀れ 一三

くすぐったい 一六

日常生活の中のリハビリテーション 一三

愛の行路 一七

女、すいさん 一四

IV

百姓きご先生……………一五

訪問看護婦が来た……………一五

悲劇はどこから……………一七

美しきもの……………一六〇

共に苦悩を直視して……………一三三

V

生きている証拠……………一六

老夫婦……………一七三

無 為……………一七九

赤ちゃん式密着介護……………一八五

はじめ……………一九一

被害と加害……………一九九

自分の顔……………二〇五

しつかりばあちゃん

三二一

背景

二七

美しい生涯

三三三

一組

三三三

おわりに

付・老年がるた

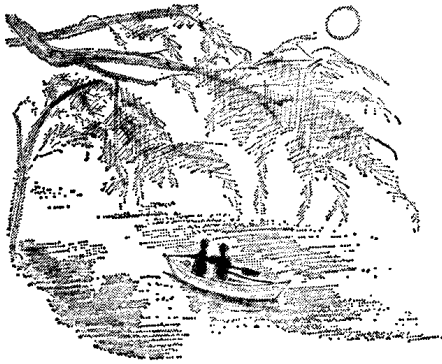
装幀 石川九楊

カット 阿部初枝

風灯下

老いと共に二十年

I



ひとりぼっち

ひでばあちゃんはその名の通り本当に「ひでえ」。彼女に振りまわされて二年余り、まったく私は沁みじみ老人のお世話をするのが嫌になった位だ。

そのひでさんがホームに入って以来一度も見せたことがない笑顔で大笑いをし、

「いやーだ先生、わっはっはっ、誰か見つけてよお願いします」

と言った。私が、

「あなたの病気は彼氏を作ってお腹を撫でてもらうしか癒る方法はないわ」

と言ったからだ。彼女と話していて私は突然そう思った。

ひでさんはこのところ膝に湿布をして欲しいと私を追いかけまわしていたのだが、それは隣ベッドの老婆がリュウマチの痛みで手足の関節に湿布をしているのを見て、

「私も湿布して下さい。何年か前転んだところが痛くなった」

と言い出したのである。その前は眠剤をもらった仲間の人を見て、

「私も眠れない」

と言うから、

「眠ってるじゃないの。ぐうぐういびきをかいて眠ってるわよ」

と言ったら、

「じゃ、眠り薬はいいからその代り下剤を下さい」

としつこい。

「下剤をやたらに飲んだら大変でしょ」

「いいえ。私のお腹の中は臓物がよじくれ廻ってあばれていて、今日はそれが交ったり離れたりいつもよりひどいんです。下剤を飲まないで静まらないの」

これは二年前入居した時から言っていることだ。最初はおどろいていろいろ落ち着かせようと薬など与えたが、すると、

「あの薬を飲んだら臓物が余計あばれだして、粉になって、それがたった今首の蚊のさ

した穴からふき出して、その粉を頭からかぶったら頭が痛くなった。何か薬を下さい」と言ってきた。毎日、毎日難癖、言いがかり、お涙ちょうだい、ミステリーのびっくり箱で、私は悩み切れなくなり彼女をとうとう入院させた。

「これだけ言うのだから何か原因があるはずですよ。調べるだけは調べて、やるだけのことはやらなきゃ、ね」

然し、親切に入れた病院でひでさんは毎日、

「ホームに帰りたい、ホームがいい」と駄々をこね、ひっきりなしに電話をよこし、

「病院が明日帰ってもいいと言いました。明日大安だから皆が帰ります。私も迎えに来て下さい」

などと言う。ところが病院の方へは、

「ホームから明日退院するように言ってきて、迎えがくるからよろしく」

と言ってあった。病院では、

「帰りたい人を無理にしぼっておく法律はないけど、頼まれて面倒を見ているのになんかということなのか。おどろきますよ」

と私を呼んで怒った。私も、

「私も今おどろいているところです。病院が退院しなさいと言ったと聞いていたので変だと思いつながら来たのですが」

「それじゃ、双方で患者さんから振りまわされていたんですね」

と笑ってしまったが、ひでさんはとも角病院が嫌で、

「もうどこも悪くない。病気が癒った」

と入院中いっぱい「病人ではない」とホームを恋しがった。

三か月して、結局彼女はどこも悪くないということでも退院してきた。私としてはそれが解れば一応は安心なので、又元のもくあみの変わらぬ生活に戻っても余り体の心配はしない日常になった。が、

「すいません、湿布して下さい。私もあちこち痛い。お腹もよじれて、苦しくて……」

つん、と私はそっぽを向く、

「知りません、お医者様の指示がないと看護婦は何も出来ないの」

「でも、やって下さい湿布だけでも」

後を付いてくる。人が見たら何と冷たいと思うだろう。でも、只ほど高いものはない。このままではひでさんは幸福には絶対なれないと思う。

ある日ひでさんは何と思ったか、

「お医者様に見ていただきたいです」

と言ってきた。

「はい、はい、いいですよ。見てもらいましょうね。そうね、患者さんが自分で診察、診断、処方、指示を皆ひとりで行っちゃうなんておかしいですものね。筋道をたてましょ」

ところがお医者様は「どこも悪くないよ。何もしなくてもいい」と言った。幾日かそのまま彼女は何もしてもらえなかったのは勿論だが、そのまま放って置いてはいけない。空しくなればせつかく軌道に乗りかかった電車が又落ちて転がってしまえそう。

「お医者様が湿布をしてもいいっておっしゃったわ。両方の膝にやりますよ」

私は湿布を始めた。するとひでさんは三日に一度位は、

「今日は休んでみませう。大分いいから」

と言うようになった。言いがかりもなくなった。然し、

「その代りお腹を見て下さい。お腹のよじれるのはどうしても癒らないんです」

と切ない顔はするのだ。

「そんなの、あなたの想像よ。何百回言ったって同じだわ。どこも悪くないのに気のせいなんだから、本当にもう……。病院でもそう言われたでしょう。いい加減で止めなさいよ」

私は相手にするのがつくづく嫌になってきた。ところがひでさんは着物を裾の方からまくり上げベッドに横たわって、

「このお腹触って見て下さるだけでいいんです。触ってみてお願い」

と言った。

「そう」

私はふっと、とても哀しいひとりぼっちの女の長い人生の旅を感じた。夫も子供も、その他の身寄りも何もない。宗教団体に入っていてホームに入っても最初のうちは年金が入ると十万円ずつ持って寄附に出かけ、そこで皆に大切にされるのを何よりの楽しみ